駅＋商業施設アワード

東急設計担当者に聞く ③

東西線浦安駅高架下に木造店舗

マーヴ浦安 鉄道建築協会賞作品賞佳作

”たすきがけ”で沿線のありかた提唱

㈱東急設計コンサルタント
建築設計本部 第2設計室 マネージャー
段谷 麻子 氏

東京地下鉄㈱（東京メトロ）とメトロ開発㈱は2025年3月28日、東西線浦安駅の高架下に商業施設「M，ａｖ浦安」（マーヴ浦安）を開業した。まず東口側（ＥＡＳＴ）を先行開業し、26年度に西口側施設を「ＷＥＳＴ」として改装オープンする計画だ。ＥＡＳＴは、東京メトログループ初の木造建築となった。環境への取り組みが評価され、鉄道建築協会賞作品賞佳作を受賞した。同施設を設計した㈱東急設計コンサルタント建築設計本部第2設計室マネージャーの段谷麻子氏に話を聞いた。

――プロジェクトの経緯から。

段谷 東西線の高架下施設が老朽化により建て替え期を迎えており、順次リニューアルを計画されていることから、設計の話をいただいた。私たちはメトロ開発に対して、かつて東西線は都心とベッドタウンをつなぐ路線だったのが、コロナ禍を経てエリアの生活を充実させる方向に変わってきていること、それを支える場所をつくっていきたいと提案した。

コンセプトは「たすきがけ」。直線の布をクロスして使うたすきを周辺住民が交わる場として、これからの東西線のあり方としてイメージした。交差するモチーフや、たすきの目印とバトンの意味合いから、地域間や時間の橋渡し、駅から来た人が交わるような場にしたいと思った。木製フレームを交差させるデザインのパーゴラや、鉄道レールを再利用しクロスさせ舗装に埋め込み、コンセプトを表現している。

――施設については。

段谷 今の東西線高架下でどのような空間が必要なのか、という議論の中で、環境貢献のワードが出て、木造にたどり着いた。東京都内では、高架下の建造物には消防による基準で壁や主要構造部の耐火構造が求められる。木造も可能だが、部材を耐火被覆するなどの措置が必要になり、コストがかかり、木の表現も制限される。

M，ａｖ浦安の外観

一方、浦安駅が所在する千葉県ではそこまではない。木造建築は、メトロ開発にとっても初の試みになるため、木造となるのはＥＡＳＴの2棟のうち1棟だけだが、一丸となり取り組むこととなった。

――施設の特徴は。

段谷 今まで使われていなかった場所を有効利用することに着目した。以前は駅裏の駐輪場で、駅に向かうための抜け道ともいえる場だった。それを新しい居場所に昇華させることができた。両サイドに店舗を設け、閉店後も照明の点灯に協力していただいている。エリアが明るくなったので誰もが入りやすくなり、滞留する場所になった。酷暑が続いた昨夏は安らげる日陰の場所としても利用されていた。

――出店テナントは。

段谷 ＥＡＳＴは飲食店と食物販の3店が出店している。建築的な話をすると、せっかく木造とするのなら地域の方に木の持つ温かみを感じてもらうため、分棟し規模を小さくすることで法令上の条件を軽くするなど、建物の配置には工夫した。出店テナントには木造の良さを理解してくれる企業に入居いただき、客席の天井は張らないなどのデザインコードを設け協力してもらい、外と中で木が連続するデザインを実現させた。

――一方ＷＥＳＴについては。

段谷 現在工事中で、26年度開業予定だ。2敷地あり、1敷地は建て替え新築、1敷地は躯体を残したリニューアルである。改札を出てまず目に入る立地であるため、浦安駅を印象付ける存在と捉えている。従前は地元感の強い商店街のような場所だったが、それを明るくオープンな施設にして人を呼び入れるようにした。

浦安市は定住人口が増えている。従前は特定の層には人気があるものの、万人が足を踏み入れやすい雰囲気では無かった。駅周辺に住まう方や駅に訪れる方が気軽に立ち寄れる施設を目指した。

ＷＥＳＴでも「たすきがけ」のコンセプトをつなげ、東西口の共通性を表現している。交差するモチーフで、クロスした木組みをイメージするようなデザインモチーフは踏襲している。

――鉄道建築賞はどこが評価されたとお考えですか。また今後の取り組みをお聞かせください。

段谷 環境配慮の取り組みとして、首都圏の鉄道高架下商業施設でも木造でつくれることを示せたと思う。加えて有効的に使えていなかった場所が、地域の人が使える場所に生まれ変わったという点が評価されたと思う。

私たちが届け出などで役所を訪れた際に、役所の方々から「どんな店が入るの」「オープンしたら立ち寄ってみよう」などと期待する声が返ってくる。そういう声は設計者にとって嬉しいもの。

東急設計コンサルタントは駅と街にかかわるプロジェクトが多い。今後も建物をつくるだけではなく、そこを利用する人に寄り添った施設づくりに取り組んでいきたい。

（聞き手・特別編集委員 松本顕介）

（この稿終わり）

誰もが入りやすくなり、滞留する場所になった

外と中で木が連続するデザインを実現させた